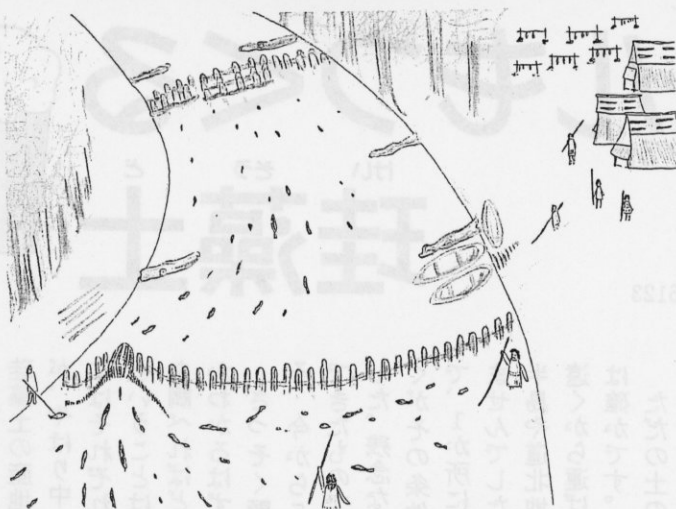




歴史のトビを捉えよう
いしかり博物誌

姿を現した 四千年前のサケ漁用「魰」



想定復元図（復元/石橋孝夫 イラスト/山崎真美）

現在まだ調査中ですが川の流
れの変化にとも
なつて少なくと
も3回作り替え
られたとみられ

自由の捕獲具を
備えていた大変
手の込んだ施設
です。

▲杭列調査の様子

「魚」偏に「入」と書いて「魰」（えり）と読みます。これは漁業の方では「網を使わない定置漁具で、杭と横木などと組み合わせ魚を誘導して捕獲する仕掛け」と定義されています。この漁法は現在、湖沼や河川などで一部みられるだけ

となつています。
ところで、先日、発見された紅葉山49号遺跡の遺構はまさにこの「魰」なのです。しかも年代測定によつて、約4000年前のもので当時すでにこのような漁法が行われていた事が分かりました。紅葉

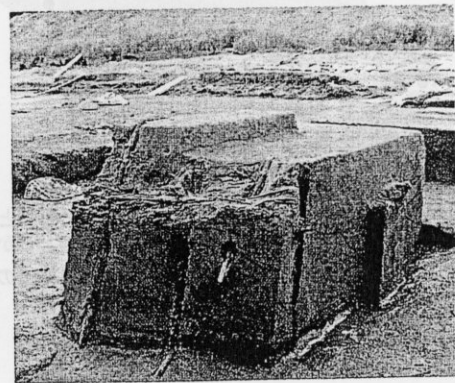
きちんと管理されていたと考えられます。

また、この遺構の上流55mでは、杭を5、6本単位でコの字形に配置した可能性のある、40本以上の杭の群がみつかつています。現時点では、下流の遺構ほど機能が明らかではありませんが、魚の捕獲施設とみて間違いなく下流と一体の遺構の可能性がります。それではこれらの施設を使つてどのような魚を獲つていたのでしょうか。

下流の「魰」のすぐ北側では、砂丘上に同時期の住居跡が2軒ありましたが、その内部の土から出た焼けた魚骨がでました。専門家に調べてもらったところ、サケの骨がたくさんありました。専門家はその量から、サケを捕獲する施設が近くにあったと考えていました。この点や出土した銚の大きさや施設が長い間、管理されている点などから「魰」はサケ漁用とみて良いと

■文化財・博物館開設準備室
☎72・6123
（石橋孝夫）

思います。サケは古くから日本の縄文時代の生活を支えた主要な食料と推定されていますが、これまでどのような方法で捕らえられていたか具体的には分かりませんでした。今回の発見は単に年代が古いという事だけでなく、縄文時代の生活を具体的に復元する上で大変重要で、考古学史上に残る大きな発見といつて良いと思います。



杭列の一部